日本キリスト教団
三軒茶屋教会

三軒茶屋 教会通り

第15号　2002年8月発行

〒154-0024
東京都世田谷区三軒茶屋1-31-5
TEL／FAX:(03)3418-4933
編集／発行:広報部

平和を実現するために

牧師 陣内厚生

この六月、シンガポールで開かれた世界連合基督教共励会に出席のため、かの地に一週間滞在した時のことです。私の旧友、日本人教会の加藤享牧師が、観光客の行かない大戦時の戦跡巡りに私たち一行を案内してくれました。それらを見学して、かつての日本軍による占領・植民地支配のもとで、アジア友邦（と称していた）の民に対し日本兵のとった威嚇・蛮行の数々を改めて知らされました。さらに帰途、シンガポール空港の書店に立ち寄ると、「Rape by the Japanese Army（日本軍による暴行）」という写真入りの新刊本が店頭に山積みされているのを見たのです。私は楽しい筈の旅の最後に、この重苦しい内なるショックをだれにも言わず、心の片隅に押さえ込むのがやっとの思いでした。

今の日本で、エレミヤに告げられた神の言葉が聞こえてこないでしょうか。「彼らは、わが民の破滅を手軽に治療して、平和がないのに、『平和、平和』と言う。彼らは忌むべきことをして恥をさらした。しかも恥ずかしいとは思わず、嘲られていることに気づかない…」（エレミヤ書六の一四ー一五）と。まさに無知なる民の姿が描かれています。

もう十七年前になりますが、当時の西ドイツ大統領ヴァイツゼッカー氏は、その演説「荒れ野の四十年」の中で、「罪の有無、老幼いずれを問わず、われわれ全員が過去を引き受けねばなりません。全員が過去からの帰結に関わっており、過去に対する責任を負わされているのであります」と述べました。この発言は、ドイツに限らず、戦争責任を負わねばならない日本が、また日本人が、真剣に受けとめるべきものではないでしょうか。まさに、イエスの言葉「今の時代の者たちはその責任を問われる」（ルカ一一の五一）が思い起こされます。

自らの犯した罪過に対して責任を覚え、謝罪するという人間の道義の基本は、なぜ日本に失われているのでしょう。いや、日本には敗北や失敗による屈辱感を認めようとせず、そこから事の意味を転嫁させることによって再起を図るという文化があると言われます（ベネディクト著「菊と刀」の論旨）。もとより強い責任意識が生まれる契機がなかったために、日本は周辺諸国からの篤い信頼を得るまでに至っていません。

私たちは負の歴史に対する責任を果たすためにも、積極的に平和を希求するためにも、聖書に尋ねなければなりません。イエスの生きざまはつねに人びとに平和をもたらす行為に徹しられました。（エフェソの信徒への手紙二の一四ー一五）。それは他者を傷つけず、退けず、忍耐強く愛し、生かして下さる、見事なまでの責任のとり方ではなかったでしょうか。

そして、私たちにこう教えて下さいました。「平和を実現する人々は幸いである」（マタイによる福音書五の九）と。イエスを信じる私たちは、他のだれよりも熱心な平和の希求者でなければならず、その平和を人びとの関わる世に創り出していかなければならないのです。